

露国篇

映画文学人生論

ゴロヴニン『日本幽囚記』井上満訳
ゴンチャールフ『日本渡航記』高野・島田訳
ドストエフスキー『死の家の記録』望月哲男訳
チェーホフ『サハリン島』原卓也訳
トルストイ『日記』(1828-1910)
参考：工藤平助『赤蝦夷風説考』(1783)

松前人の語るところによれば、蝦夷（北海道）のむこうの、東北の方向に国がある

工藤平助『赤蝦夷風説考』の序は、カムサスカとは赤蝦夷の本名である」と書き出し、「つらつらその由来を検べてみると、オランダの東隣にあたり、「ヲロシア」という国がある」と続けている。当時の日本人にとっては、フランスやドイツは存在せず、オランダの隣国はロシアという程度の認識だったらしい。

「松前人の語るところによれば、蝦夷（北海道）のむこうの、東北の方向に国がある」。

当時の日本人はオランダ人のことを紅毛人、ヲロシア人を赤蝦夷と呼んだ。蝦夷人といえはアイヌ人のことだから、赤蝦夷はアイヌ人の親戚のようなものだ。

その赤蝦夷人が書いた五冊の書を読んでみた。作者はみんな教養があり、ものわりのよい紳士ばかりだ。こんな紳士ばかりが住んでいる赤蝦夷は理想の国のように思えてくる。特に日本にやっできて日本人と直接、接触した『日本幽囚記』のゴロヴニンと『日本渡航記』のゴンチャールフは観察力がすぐれ、日本人をよく理解している。

ゴロヴニン『日本幽囚記』井上満訳

ゴンチャールフ『日本渡航記』高野・島田訳

ドストエフスキー『死の家の記録』望月哲男訳

チェーホフ『サハリン島』原卓也訳

トルストイ『日記』(1828-1910)

露国篇

映画文学人生論

ドストエフスキーは日本人を知らなかったが、政治犯としてシベリアのオムスク要塞監獄で過ごした四年間の経験の基づいて『死の家の記録』を書いた。その経験は、第二次世界大戦後にシベリアに抑留された日本人にも引き継がれ、日露共有の知的遺産になっている。

チェーホフも日本を訪れたことはないが、サハリン島（樺太）まではやってきて、ギリヤーク人を知った。ギリヤーク人は、サハリン島の先住民だが、アイヌ人に追われて北方に逃れ、現在は少数民族として細々と暮らしている。

ギリヤーク人の性格は、好戦的でなく、論争や喧嘩を好まず、どの隣人とも平和に折り合っている民族だという。彼等は勇敢で、陽気で、親しみやすく、自分の上には一切の権力を認めないし、目上とか目下の概念もない。このような民族の運命は必然だろうか、偶然だろうか。

トルストイは徳富蘇峰をはじめとして多くの日本人と面識があり、彼の思想を信奉する日本人は多いが、日本海軍がバルチック艦隊を破ったときの日記の筆致は冷めている。「すべての物質的な改善の技術面での日本人の成功は、これらの技術的な向上、文化と呼ばれているものが、いかにくだらなものであるかを明白に示したのである」。

船漕（こ）ぐ明け暮れ 鎖につながれ 思いはいつか 母のおもかげ 囚人の歌